

中日新聞
「リンクト」**LINKED**
P R E S E N T S

シアワセを つなく仕事

米津智子、加藤しおり ● 総合周産期母子医療センター

安城更生病院

企画制作 中日新聞広告局 編集 有限会社エイチ・アイ・ピー

私たちの関わる一瞬一瞬が、
赤ちゃんの健やかな成長に
つながっている。

HERE! e-LINKED
www.project-linked.jp/

小さな命を守り、つなぐために、 NICU（新生児集中治療室）では今日も 手厚いケアが実践されている。

世界一とも言われる、日本の新生児医療。
たとえば1000g未満の赤ちゃんでも、ほとんどが健やかに成長している。
その最前線にいる看護師たちは、24時間体制で赤ちゃんを見守り、
密度の濃いケアを提供している。
安城更生病院の総合周産期母子医療センターで日々、
小さな命と向き合う看護師たちに話を聞いた。

看護師たちの声を 取り入れて設計された 新しい新生児センター。

まだ体重は1500gほど、
ようやく状態が良くなったので、
少しの間だけ保育器から出るこ
とができた赤ちゃん。この日を
待ち望んでいたお母さんは慣れ
ない手つきで小さな体を胸に引
き寄せ、心から幸せそうな表情
を浮かべた。

こうした光景は日々、NICU
（新生児集中治療室）で見られ
るものだが、新生児集中ケア認
定看護師として勤務する加藤し
おりは「初めてお母さんが抱っ
こした瞬間を見るのが大好き」
だという。「普通の赤ちゃんは、
当たり前のように抱っこしても
らえますが、NICUにいるお
子さんは、抱っこもままなりま
せん。抱っこは、赤ちゃんにとっ
ても家族にとっても大きな歩

だと思っています」と語る。

安城更生病院では平成22年
12月、総合周産期母子医療セン
ターを開設。これに先立って、
新生児センターは従来の3倍に
診療面積を拡大し、NICU15
床、GCU（継続保育室）30床の、
全45床へ増床。医師・看護師な
ども増員され、万全の態勢で新
生児医療に取り組む環境が整え
られた。

新しい新生児センターの設計
では、加藤たち現場スタッフの
意見が多く取り入れられた。そ



の代表例は「ファミリールーム」

だろう。ファミリールームとは、
家庭に近い雰囲気でおちゃんと
家族が一緒に過ごせる空間。退
院準備のほか、残念ではあるが、
看取りの場に使用されることもあ
る。「以前は狭い空間にご家族
がひしめきあい、プライバシー
を保てませんでした。でも、ほ
かの病院をいくつか見学し、ファ
ミリールームの充実が必須と考
えたんです」。そう語るのは、
加藤の先輩であり、同じく新生
児集中ケア認定看護師の米津
智子である。「元気に退院され
るご家族ばかりでなく、ここで
最期のひとときを過ごされるご
家族もいらつしやいます。ご家
族が穏やかでやさしい気持ちに
なれる空間づくりをめざしまし
た」。

新生児と家族にもっとも近い
存在である看護師たち。その声

COLUMN

●認定看護師制度は、高度化・
専門分化が進む医療現場における
看護ケアの広がり、看護の質向
上を目的に設けられた日本看護協
会による資格制度。所定の実務
経験を有し、教育機関で専門の
教育・研修を受けた後、認定審
査に合格した者に資格が与えられ
る。認定看護師第一号が誕生した
のは平成9年で、それ以降、次第
に認定看護の分野も広がり、全国
で数多くの認定看護師が活躍して
いる。

●新生児集中ケア認定看護師は、
新生児集中医療分野で幅広い知
識・技術をもち、新生児の看護
や親子関係の形成を助けるケアの
実践、指導を行うスペシャリスト。
安城更生病院では、ほかに糖尿病
看護、緩和ケア、訪問看護など
多様な分野で多数の認定看護師が
活躍しており、病院では経済的バツ
クアップを惜しまず、スペシャリス
トをめざす看護師たちを支援して
いる。



を最大限に取り入れ、安城更生病院では「赤ちゃん和家人の絆」が深まるようなアットホームな環境と、高度な治療環境を両立させたのである。

ハイリスク新生児の看護とともに 赤ちゃん和家人の絆を深めるケアを。

「赤ちゃん和家人の絆」を大切にする姿勢は、日々の看護にも反映されている。加藤は言う。「NICUは家族が主体の空間です。赤ちゃんにとっては成長の場であり、ご家族にとつては育児の場にもなります。赤ちゃん

んと離れ離れになったご家族を結ぶよう心配りし、私たちはサポートする側に徹しています」。

新生児センターでは24時間、両親の面会を受け入れ、「いつでもわが子に会って、触れ合うことができる環境」を提供している。また、早く生まれてきた赤ちゃんには、お母さんの胎内で守られているような照明や音響を工夫する「ディベロブメンタルケア」に力を入れている。赤ちゃんの健全な発達を促すとともに、家族の安心感も育むやさしい環境だ。母親のなかには、痛々しいわが子に会つのを辛く感じる人もいる。そういう気持ちを癒すのも、看護師の大切な役目になる。「お産に至るまで、そしてお産した後も、お母さんはいろいろな物語をもっています。それを読み取りながら、こ



ちらが強要するのではなく、自然とお子さんを受け入れるようなサポートを心がけています」と米津は語る。

その一方で、いつ急変するともわからない新生児の看護には、常に高い集中力が要求される。NICUでは24時間態勢で赤ちゃんの反応やサインを見逃さず、一人ひとりに合った手厚い看護を実践している。さらに米津は、産科も含めた総合周産期母子医療センターとしての使命感を感じると言う。「お子さんが蘇生を必要とする状態で生まれてきた場合、センタースタッフの対応次第で、お子さんの将来が変わってきます。私たちスタッフにとって、救命は何をおいても一番ですが、後遺症なき生存をめざすという責任があると思います。NICUにおいても、私たちの関わる一瞬一瞬が、お子さんの成長、そして、その後の人生へつながっていると肝に銘じています」。

これが最善の看護なのか。 自問自答のなかで決意した 「新生児集中ケア認定 看護師」へのチャレンジ。

米津も加藤も、入職以来ずっ



と新生児医療に携わってきた。その道のりの途中には当然、つまずき、立ち止まることもあっただろう。米津が認定看護師に挑戦した動機も、自身の看護への疑問からだったという。「日頃の業務のなかで、本当にこれが赤ちゃんやご家族にとつて最

中日新聞
「リンクト」**LINKED**
PRESENTS
シアワセを
つなぐ仕事

善なのか、ほかに新しい方法はないのか...と。もっと勉強して、後輩たちにもいいアドバイスができるものかと悩んでいました」。

当時、新生児集中ケア認定看護師の教育課程は広島にしかなかったが、病院のバックアップもあり、上司から強く背中を押されて、米津は3期生として入学した。「学校で学んだのは、看護の行為一つひとつにエビデンスが必要だということ。それまで経験値でやっていたことを白紙に戻し、基本に立ち帰ることができました」。

戻ってきた米津の仕事ぶりを見て、後輩たちは大いに触発された。加藤も、先輩の変化に目を見張った一人だ。「赤ちゃんに接する姿勢が明らかに違って、素敵だなと思いました」。米津の前向きな姿勢に憧れ、加藤も昨年、教育課程を学び、資格を手にした。「病院に戻って自分がどう活動するかをイメージしながら勉強するといよいよ」という米津さんのアドバイスを忘れず、しっかりと学んでくることができました」と笑顔で振り返る。

病院内に留まらず、地域全体に視野を広げ、新生児医療の質を高めていきたい

安城更生病院では、総合周産期母子医療センターになると同時に、新生児搬送ネットワークをスタートさせた。これは、地域の分娩施設から要請を受けると、新生児専用ドクターカー「きらり」が出動し、医師や看護師らが現場に駆けつけ、迅速で適切な治療をしながら新生児を搬送するシステムだ。

「きらり」の始動にあたっては、米津も加藤も入念なシミュレーションや勉強会を繰り返し、車内設備の設計にも参加した。現在も交代で同乗しており、多くの新生児搬送にあたっている。「『きらり』が出動するようになり、地域の分娩施設の方々と触れ合う機会も増えました。そういう方々と連携し、西三河南部地域の周産期医療の質を上げていかなければ、と考えています」と加藤は抱負を語る。また、米津は看護師同士の連携に力を注ぐ。「今、新生児集中ケア認定看護師が愛知県内に16名いますが、その者たちが定期的に集

まり、看護の質を高めるために意見交換しています。こうした活動を今後さらに、地域全体へ広げていきたいですね」。

NICUの小さな保育器で命の営みを始める赤ちゃん。その

先には長い人生が待ち受けている。「赤ちゃんがすてきな生涯を送れるように、精一杯の看護をしていきたいですね」。二人は思いをついに、明日の新生児医療を見つめている。



BACK STAGE

●年々出生率が低下していくなかで、低出生体重児（2500g未満）の出生数は増加傾向にある。ハイリスクをもった小さな命を守り、育てるには、高度で専門的な医療機能が要求される。そこで今、全国の都道府県で、厚生労働省のリードにより総合（地域）周産期母子医療センターの整備が進められている。

●地域周産期母子医療センターとは、周産期に関する比較的高度な医療行為を行い、総合周産期母子医療センターを補完する施設である。総合周産期母子医療センターを頂点に、地域周産期母子医療センター、さらにそのほかの分娩施設が互いに役割分担し、しっかり連携することで、地域の産科・新生児医療を支え、守っていく。そんな周産期医療のシステムづくりが今後ますます重要になっていくと言えるだろう。

企画制作

中日新聞広告局

編集協力

愛知県厚生農業協同組合連合会

安城更生病院

〒446-8602

愛知県安城市安城町東広畔28番地

TEL 0566-75-2111

FAX 0566-76-4335

<http://www.kosei.anjo.aichi.jp/>

お問い合わせ

中日新聞広告局医療プロジェクトチーム

TEL 052-221-1079

FAX 052-212-0434

PROJECT LINKED事務局

(有限会社エイチ・アイ・ピー内)

TEL 052-339-1645

FAX 052-339-1646

<http://www.project-linked.jp/>

中日新聞
「リンクト」

LINKED
PRESENTS
シアワセを
つなぐ仕事

プロジェクトリンクト

検索